

ステビアの栽培法確立に関する研究

第2報 鹿児島県本土における栽培時期について

江畑正之・上妻道紀

(鹿児島県農業試験場)

EBATA, M. and KOUZUM, M.

Studies on Cultivation of *Stevia rebaudiana* Bertoni.

2. Suitable Cropping Season in Mainland of Kagoshima Prefecture.

本県においては、昭和49年から「ステビア」の試作、栽培方法の検討を行っており、第1報ではさし木繁殖について報告した。本報では、鹿児島県本土における栽培時期について、特に植付時期の面から検討を加え、一応の試験結果を得たので報告する。

1. 試験方法

植付時期は第1回目を3月25日、以降10日おきに7月10日まで7回にわたり定植した。栽植密度は、うね幅60cm、株間20cm、アール当り栽植本数、833本施肥量(アール/kg)は基肥として、N:1.0, P₂O₅:1.6, K₂O:1.6、追肥としてN:0.5, K₂O:1.5を第1回収穫後施用した。

2. 試験結果および考察

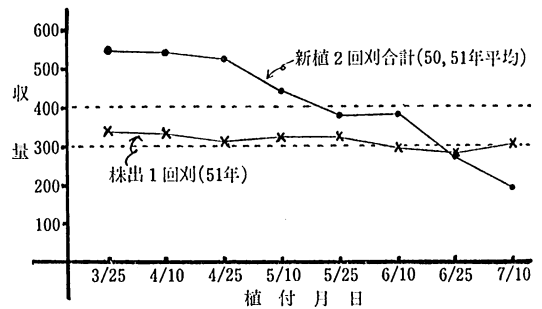
は種は木箱に川砂をつめ、種子を散ばし、十分かん水後、水稻育苗器(20~25℃)で発芽させ、発芽後はビニールハウス内に移し、本葉2~4枚(は種後25~30日)の頃、ビニールポット(タバコ用)に仮植した。苗床日数は90日(50年)~75日(51年)前後を要し、定植時の苗長は、3月25日、4月10日植区で6~7cm、4月24日、5月10日植区で15cm程度、5月25日植以降では20~30cm程度で気温の上昇と共に伸長が早く徒長して、分枝が比較的上位節より発生し、倒伏の原因になる。したがって、定植時の苗長は、15cm内外で本葉14~16枚程度が適当と思われる。

次に収穫時の茎長は植付時期の早い区程高く遅れるにつれて低くなるが、5月10日植以降では極端に低くなり生育量も劣る。また分枝数についても、茎長と同様に植

付時期が遅れるにつれて少なくなる傾向にある。

収量性については植付時期による収量差が顕著に現われ、3月25日、4月10日、4月25日植区の間に大差は認められないが、5月10日植以降の晩植になると減収度合が大きく、3月25日植区に比較して5月10日植、80%、6月10日植70%、6月25日植50%7月10日植36%であった。一方3月の低温期に植付ても生育が抑制されるために収量は4月植との間に大差ない、したがって鹿児島県本土における植付適期は4月上旬~下旬が適当と考える。

次に新植での植付時期の差が翌年の株出に及ぼす影響についてみると、6月植以降の極晩植になると減収の傾向にあるが、5月下旬頃までの植付であれば、株出への影響は少ないものと思われる。



収量比較図 (10 a/kg)

3以上の結果にもとづいて 鹿児島県本土における栽培時期をまとめると次のとおりである。

項目	は種期	仮植期	定植期	収穫期		
				1番刈	2番刈	3番刈
新植	1月下旬~ 2月上旬	2月下旬~ 3月上旬	4月上旬~下旬	7月下旬~ 8月上旬	10月上旬~中旬	—
株出	2	回	刈	7月上旬~中旬	10月上旬~中旬	—
	3	回	刈	6月下旬~ 7月上旬	8月下旬~ 9月上旬	10月下旬